明石の史跡（８０）曾我物語

太山寺の所蔵する複数の古典籍のなかに、『曾我物語』の名がみえる。いわずと知れた曾我兄弟による、仇討ちの物語である。

建久４年（１１９３）５月２日、北条時政、駿河国に下向。将軍頼朝の狩猟のため、伊豆・駿河の御家人に、旅宿以下の作事を命令。監督のため先発す。

８日、頼朝は、足利義兼・小山朝政・畠山重忠・三浦義澄ら、錚々たるメンバーを供に、富士野の夏狩りに出発。

１５日、富士野の旅館に入り、待機していた北条時政の接待をうけ、終日の酒宴が始まる。

２８日、子の刻（午後１１時から午前１時までの間）、曾我十郎祐成（すけなり）・五郎時致（ときむね）兄弟は、工藤祐経（すけつね）の宿所に推参（押しかけ）して、親の仇を討つ。宿願を果たすも、兄祐成は新田忠常に討たれ、弟は頼朝の寝所を目指すも、大友能直に阻まれるという、謎の部分が残されるけれども、苦節１８年目の宿願は果たした。この事実を下敷きとして、鎌倉末から南北朝期にかけて物語が成立する（『吾妻鏡』・『国史大辞典８』）。

この太山寺が所蔵する『曽我物語』は、現存最古の写本として有名で、国の重要文化財に指定されている。その奥書によれば、天文８年（１５３９）１１月２日、当地方の支配者である、明石四郎左衛門尉長行が、亡妻の命日に、寄進したものでいる（「太山寺文書」・『兵庫県史史料編』中世２．５９－６０頁）。

この寄進行為の名分である亡妻の命日の年次は確認できない。寄進された書目には、古今集・伊勢物語・平家物語なども含まれ、これほどの典籍の寄進の理由を、即身成仏（生きているままで、究極の悟りを開き仏になること＝日本語表現辞典）のみに求めてよいものかどうか。天文６年（１５３７）暮れからはじまる、尼子詮久（あきひさ）の播磨侵攻という事実を、看過できないと思われる。

日本歴史学会会員　　茨木　一成